



滋賀テックプラングランプリ
特別賞受賞

一隅を照らす人々



若鮎遡上会
実行委員会

特集

一燈照隅



リレー・フォー・ライフ・ジャパン
滋賀医科大学実行委員会



第3回創生アイデアコンテスト
優秀賞受賞



「食事による循環器疾患リスク予測ツール」を
ウェブサイトで一般公開



体験的学習を質的に
促進する
VR教材を開発





振り返りと交流をテーマに
次の成長につながる
『若鮎遡上会』を実施



若鮎遡上会
実行委員長
山口 瑠心さん
(医学科3年生)

CONTENTS

特集

一燈照隅 ～一隅を照らす人々～

若鮎遡上会実行委員会	医学科3年・山口 瑠心さん(実行委員長)	2
リレー・フォー・ライフ・ジャパン滋賀医科大学実行委員会	医学科4年・上原 希さん(実行委員長)	4
滋賀テックプラングランプリ特別賞受賞者	医学科5年・石山 博章さん	6
第3回創生アイデアコンテスト優秀賞受賞者	医学科2年・松山 峻大さん	8
厚生労働大臣表彰を受賞 (小児発達支援学部門：竹内特任教授)		10
ワクチン接種への貢献に対し、滋賀県から感謝状を受領		10
令和4年度滋賀県救急医療功労者知事表彰受賞(救急・集中治療部：辻田准教授)		11
谷特任教授、山田特任准教授、仲客員教授が 令和4年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞		11

食事による循環器疾患リスク予測ツールの一般公開 - NIPPON DATA研究より -	12
---	----

看護学教育の新たな挑戦 - Virtual Reality (VR) を活用した実践・体験的学習 -	14
--	----

産学官連携により、6つの共同研究講座が新設	16
-----------------------	----

活動実績ダイジェスト	18
------------	----

滋賀医科大学は開学50周年を迎えます	22
--------------------	----



滋賀医科大学では、学生で組織した実行委員会によって、学園祭「若鮎祭」を毎年10月に実施してきました。新型コロナウイルスの感染が拡大して以降は実施が見送られたり、規模を縮小してオンラインで行ったりしてきましたが、2022年は3年ぶりに実施の方向で委員会が組織されました。

メンバーと協力して若鮎祭を企画運営する経験から得ることは多いはずという思いから、4月に実行委員長に就任しました。3年ぶりに学外の方々にも来ていただいで、楽しんでもらえるような若鮎祭にしたいと思っていました。

ところが5月に本学学生が逮捕され、6月に起訴されたことから、従来とは違う形式で実施するか、あるいは中止するかを先生方とも何度も協議しました。その結果、「本学学生が今回の事件について考える機会とすること」「学生同士の交流を促すこと」を目的に、「祭り」ということばは使わず、「若鮎遡上会」と

いう名称で実施することになりました。長年実施してきた若鮎祭の文化は消したくないという思いで、若鮎」という言葉を残し、会を実施することによって学生の成長につながってほしいという願いを込めて「遡上」ということばを選びました。

7月に「若鮎遡上会」の実施が決定したため、委員会のメンバーは8月から3カ月弱というタイトなスケジュールで準備を行うことになりました。学生の交流を図るために、各部活やサークルの発表などさまざまな企画を準備しました。また、事件の振り返りのために「医学生の特権意識と医学界の狭さ、世界の狭さや特権意識」「医療現場・ジエンダーの行動経済学」をテーマに、養老孟司東京大学名誉教授ら外部講師による講演会、学生団体FMSA-Japan（国際医学生連盟）によるワークショップやグループディスカッションなどを行うことにしました。

また、学園祭のような飲食系の模擬店は出店しないこと、SNSなどによる情報発信は行わないことなどを決めました。外部講師への交渉も含め、さまざまなことに配慮しながら、短時間で準備を行う中で、時にはメンバー間で意見が対立することもありました。その都度話し合いを重ねて着地点を見出しながら、当日を迎えました。最終的にみんなを巻き

込んで、無事開催できて本当に良かったと思います。会場に集まった学生から、「色々な制約がかかった開催であったが、どれもよく考えられた企画で、参加してよかった」「普段考えないことを考える良い機会になった」といった肯定的な声が寄せられたことにも手応えを感じています。

困難な状況の中、実行委員長として仲間とともに「若鮎遡上会」を企画・実行した山口さんは最後に「一緒に頑張ってくれた仲間には感謝の気持ちでいっぱいです。今回、得られたさまざまな経験や評価された点を、来年の若鮎祭に引き継いでいってほしいと思います。」と、来年の実行委員にエールを送りました。





リレー・フォー・ライフ・ジャパン
滋賀医科大学実行委員会
委員長 上原 希さん
(医学科4年生)

患者さんを支援するリレーイベントを開催



リレー・フォー・ライフは、がん患者さんやそのご家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧を目指すチャリティ活動です。1985年、アメリカで1人の医師がトラックで24時間走り続けてアメリカ対がん協会への寄付を募ったことから始まり、今では世界約30カ国、約4500カ所で開催されています。

「Save Lives」を使命とし、がんの告知を乗り越え、生き延びることを祝福し（Celebrate）、旅立った愛する人たちの（お）（Rememban）、がんで苦しむ人や悲しむ人をなくす社会を作るため立ち向かう（Fight Back）ことを目的としています。

滋賀医科大学のリレー・フォー・ライフは、日本初のカレッジリレーとして2016年にスタートしました。

私は昨年から実行委員長を務めており、活動を通じて多くのがんサバイバー（がん経験者）やケアギバー（がん患者さんのご家族など）と接する機会があり、たいへん貴重な経験になっています。

活動のメインは毎年10月に行われる24時間歩いてリレーを繋ぐイベントですが、台風の影響や新型コロナウイルスの流行を受け、2019年からの3年間はオンラインのみでの開催となっていました。2022年はオンライン開催に加え、学内関係者に限ったリアル開催というハイブリッド形式で実施すること

しました。

リアル開催の経験者がほとんどいない中、OB・OGと相談しながら、実行委員一人一人が知恵を出し合い、コロナ対策など制約のある中で、いかにやりたいことを実現していくか、ゼロから創り上げることになりました。

さまざまがんについて、医学生視点で発表を行う学生企画では、子宮頸がん、小児がん、白血病をテーマに、保健師さんとがん検診について学んだり、子どもたちが治療のために滞在するチャイルド・ケモ・ハウスや、実行委員のメンバーが実際にドナー登録を行った体験などを紹介しました。

その他にも、演奏や踊りを楽しむチーム企画、キャンドルを灯してがんで亡くなった方をしのび、がんと戦っている人々を励ます『ルミナリエ

セレモニー』、参加者が交流する『かたりば』などを実施し、YouTubeでライブ配信を行いました。

また、もう一つのイベン



地域でがんと向き合い、

ト「セルフウォークリレー」チャリティウォーク」を9月16日から10月16日までの1カ月間行いました。これは新型コロナウイルス感染症拡大を考慮し、2020年からスタートしたもので、スマートフォンにアプリをダウンロードすれば、だれでも参加できるようになっています。参加者が歩いた歩数に応じて、協賛企業から寄付が行われ、その寄付ががん患者さんを支援する「がん相談ホットライン」の運営などに当てられています。

終始、穏やかな雰囲気です。語ってくれた上原さんは、締めくくりにして「リレー・フォー・ライフは、がんで苦しんでいる人、闘っている人、それを支えている人がいるという事実を知り、がんに対する理解と正しい知識を身につけることができるまたとない機会です。『Save Lives』を使命に掲げるこの活動が、がんと向き合う機会を提供するのみならず、かけがえのない「自らのいのち」に目を向けるきっかけとなり、活動の輪が今後ますます広がっていくことを期待しています。」と話してくれました。

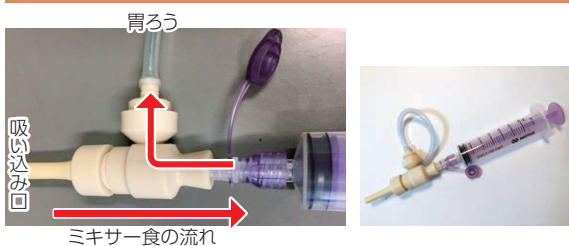




『経腸栄養作業を楽にするシリンジノズル』が
第7回滋賀テックプログラミングコンプリで
特別賞を受賞

石山 博章さん
(医学科5年生)

考案した流路自動切換えノズルの仕組み



中に弁が入っており、流路が自動で切り替わる
→ コネクタを脱着せずに済み、シリンジのピストンを押し引きすると、腕から吸い込んだミキサー食が自動的に胃ろうに送り込まれる。作業時間が短くなることに加え、胃ろうのチューブを押さなくて済むので、シリンジを両手で握られて、肩や手に無駄な力が入らずに操作できて、疲れにくい。

(参考) 考案デバイスの使用実験をした際の写真



従来の作業

- ・ノズルがべとべとになる
- ・シリンジを片手で操作



考案ノズルを使った作業

- ・シリンジを両手で操作
- ・コネクタを何回も脱着しないで済む



『社会医学フィールド実習』の授業で
びわこ学園医療福祉センターを見学した

2022年7月9日、びわ湖大津プリ
ンスホテルで開かれた「第7回滋賀テッ
クプランングランプリ」最終選考会で、石
山さんのチーム「医療現場の苦勞を減
らし隊」が、特別賞（タカラバイオ賞）
を受賞しました。

『滋賀テックプランングランプリ』は、滋
賀発成長産業発掘・育成コンソーシアム
が運営する研究開発型創業支援プログラ
ム「滋賀テックプランター」の支援成果
発表の場で、次世代技術や情熱をもって
滋賀県から世界を変えようとするチーム
を発掘・育成することを目的に開催され
ています。

際、胃ろうへのシリンジ注入作業が、介
護スタッフにとってかなりの負担となっ
ていることを知りました。胃ろうとは、
□から食事をするのが困難な方などが
手術によって腹部に小さな穴を開け、専
用のチューブを挿入し、栄養補給をする
方法です。

実際の作業では、片手でシリンジを操
作しながら粘度の高いミキサー食を吸い
上げ、胃ろうにつながるチューブにシリ
ンジを接続し、しっかりと押さえながら注
入します。注入後はチューブからシリ
ンジを外して、再びミキサー食を吸い上げ
るといふ作業を繰り返すため、手に大き
な負担がかかり、手を傷める介護スタッ
フも少なくないとのことでした。そこで、
この問題を解決するため、実習の一環と
して、8名のチームを編成し検討を開始
しました。

検討の結果、シリンジをつけ外すこと
なく、押し引いたりするだけの動作
で、胃ろうにミキサー食を注入できるデ
バイス（シリンジノズル）を開発するこ
ととしました。試作品を作った現場のス
タッフの方々に見せたところ、「これを
ぜひ実用化してほしい」という声をいた
だいたため、本格的に開発を進めること
にしました。私は滋賀医科大学に入学す
る前、メーカーの開発室で勤務してお
り、試作においては、その時の経験が役
立ちました。5号機まで改良を重ねた結
果、学内のアイデアコンテスト「第5回

SUMSピッチコンテスト』で優秀賞
を受賞、その後テックプランングラン
プリにエントリーすることになりました。

医療現場では、さまざまな課題が
あったとしても、その現場が過酷であ
ればあるほど、その大変さが当たり前
として認識されてしまうことがありま
す。現場のスタッフの方々は自分の負
担を顧みず、献身的に一生懸命従事し
ておられます。その姿に感動したこと
が、今回のデバイス開発に挑戦する
きっかけとなりました。今回の経験を
活かし、将来は医師として医療機器の
開発に携わっていきたくと考えていま
す。また、今回の開発は一人では決し
てここまでできなかったと思いますし、
チームで目的を共有することの大切さ
を学びました。

これまでの経験を生かし、医療機器
開発へ第一歩を踏み出した石山さんは、
インタビュウの中で「実際に使用する
スタッフの意見に耳を傾け、繰り返し
改良を重ねたこのデバイスは、多くの
方々の協力により現在実用化に向け働
き出しています。

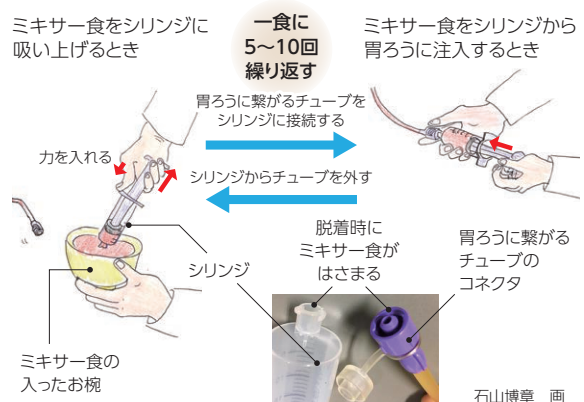
現場を体験したからこそ生まれたこ
のデバイスが、献身的に働くスタッ
フの負担を軽減する日が来ることを、
待ち遠しく思います。」と今後への期
待を語ってくれました。

ミキサー食の経胃ろう注入作業風景(全体図)



石山博章 画

ミキサー食の経胃ろう注入作業風景(手元の拡大図)

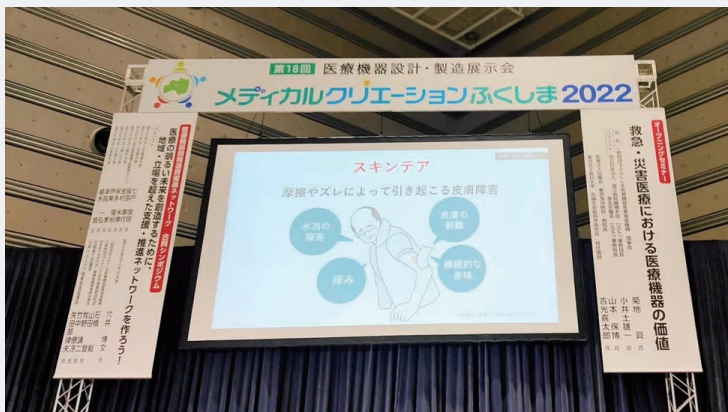


石山博章 画



を受賞

松山 峻大さん
(医学科2年生)





皮膚への負担を軽減する 医療用テープが アイデアコンテストで優秀賞

2022年10月27日、福島県郡山市で開催された「第3回創生アイデアコンテスト」で、松山峻大さんが優秀賞を受賞しました。これは一般社団法人ふくしま医療機器産業推進機構が主催するアイデアコンテストで、全国の高校生、高専生、専門学生、大学生、大学院生を対象に、健康・医療・介護などのヘルスケア領域における課題とその課題を解決するためのアイデアを募集するものです。

当日は約100チームのエントリーの中から一次審査、二次審査を通過した8チームによるプレゼンテーションが行われ、私のチーム「つつむ」は、「医療用テープ使用時の皮膚への負担の軽減をめざして」というテーマで発表を行いました。私がこのテーマに取り組むことになったのは、医療分野における新たな製品・サービス開発に必要なビジネスの視点を学ぶ「医療イノベーションの基礎」という授業を選択したことがきっかけです。医療用テープを剥がすときの痛みが患者さんや医療・介護スタッフの負担になっていることから、医工連携で東京理科大学

や多摩美術大学の学生らと、これを解決する方法を検討しました。

2月に行われた学内のアイデアコンテスト「第5回SUMSピッチコンテスト」では優良賞に選ばれ、その後、手直しを加えて、創生アイデアコンテストへエントリーしました。当初はテープをスムーズに剥がすために剥離剤を使うというアイデアでしたが、コストや使い勝手を考えて別のアイデアを検討することにしました。生命科学講座(化学)など学内の研究室や先輩、そして附属病院の看護師さんからアドバイスを受けながら、剥がすタイミングになるとテープの色が変わるフィルムの開発に取り組みました。

アイデアコンテストでは、青から水色を経て白になるという色の変化により剥がすタイミングを知らせるというアイデアが評価されましたが、期待したようにまく色が変わらず、材料を変えたりしながら何度も実験を繰り返しました。実用化するにはまだまだ改善の余地があり、これからの学生生活の中で、実現に向けてどのようなスパンで試作品の製作などを進めていけるかがポイントになると考

えています。

このアイデアに対して、現場からはぜひ実現してほしいという声が多く寄せられたほか、テープングや湿布などへの応用も期待されており、12月に行われた第39回滋賀医科大学シンポジウムでも「Best young researcher」を受賞しました。

取り組んでみて良かったことは、さまざまな人と出会って交流できたことと周りの人たちの支えを改めて実感したことです。感謝の気持ちを忘れずにこれからも活動を進めていきます。

所属する柔道部では部長として活躍する松山さんは、昨年10月に開催された「第68回関西歯薬学生柔道大会」では新人戦で見事優勝を果たしました。「今後は先輩の活躍を後押ししながら、チームメイトと共に、西医体や団体戦でも優勝を目指し練習を続けます」と意欲をのぞかせました。

竹内特任教授が、「令和4年度
母子保健家族計画事業功労者厚生労働大臣表彰」を受賞しました

2022年10月27日(木)、28日(金)に島根県民会館で開催された「令和4年度健やか親子21全国大会」において、本学小児科学講座(小児発達支援学部門)竹内特任教授が、厚生労働大臣表彰候補者として推薦され、「令和4年度母子保健家族計画事業功労者厚生労働大臣表彰」を受賞しました。

本事業は、昭和41年から行っており、今回で56回目となります。母子保健事業又は家族計画事業の推進に資するため、本事業に長年従事し、著しい功績のあった個人及び団体に対し、厚生労働大臣表彰を行っています。

竹内特任教授は、以下の実績等が評価され、表彰されました。

- 2001年に滋賀医科大学に赴任後、県内小児医療体制とNICU(新生児集中治療管理室)の整備に取り組んだこと
- 2002年に発達外来部門を開設し、以後20年間にわたり発達障害に積極的に取り組む小児科医の確保に尽力したこと
- 関連施設やこども家庭相談センターで小児の診療にも携わり、地域の発達支援センター、障害福祉課、教育委員会等で医学的助言を行い、子どもの心身の健やかな発達・成長に貢献したこと



小児科学講座(小児発達支援学部門)
竹内 義博 特任教授

滋賀県からワクチン接種協力への
感謝状をいただきました

本学は、滋賀県や大津市の実施する新型コロナウイルスワクチンの接種に協力しています。

2022年3月から開始された滋賀県広域ワクチン接種センター南部会場での追加接種(3回目接種、4回目接種)について、県からの要請をうけ、附属病院の全診療科が協力し、すべての接種実施日に2名の医師を派遣しました。3月から8月までの設置期間中に延べ197名が責任医師あるいは予診医師の業務に従事しました。

このような本学の貢献に対し、2022年9月13日(火)、滋賀県健康医療福祉部の市川部長から本学の上本学長に感謝状を贈呈いただきました。



感謝状贈呈式の様子

コロナ禍
3年目の
対応

2022年1月頃から始まった感染力の強いオミクロン株(BA.1株など)を中心とした第6波・第7波では、病院スタッフにも感染者が相次ぎ、感染制御部のアドバイスを得ながら、感染症の封じ込めと診療機能の維持に努めました。また、滋賀県からの要請に応じて新型コロナウイルス感染症の専用病床を最大38床確保し、各診療科からスタッフを派遣して「治療チーム」を組織して対応しました。

本学救急・集中治療部 辻田准教授が 「令和4年度 滋賀県救急医療功労者知事表彰」を受賞しました

2022年9月2日(金)、滋賀県庁において行われた「救急医療功労者表彰式」において、本学救急・集中治療部の辻田准教授が、「令和4年度 滋賀県救急医療功労者知事表彰」を受けました。

この表彰式は、救急医療週間(救急の日:9月9日を含む一週間)にちなんで開催されており、多年にわたり地域の救急医療の確保、救急医療対策の推進に貢献のあった個人および団体に対し、その功績を称え行われるものです。

辻田准教授は、以下の実績等が評価され、表彰されました。

- ICUの責任者として、集中治療が必要な救急患者の受け入れ態勢の構築に尽力したこと
- 特に重症の救急患者の受け入れにおいて、良好な治療成績により、県内の重症救急患者の救命率向上に大きく寄与したこと

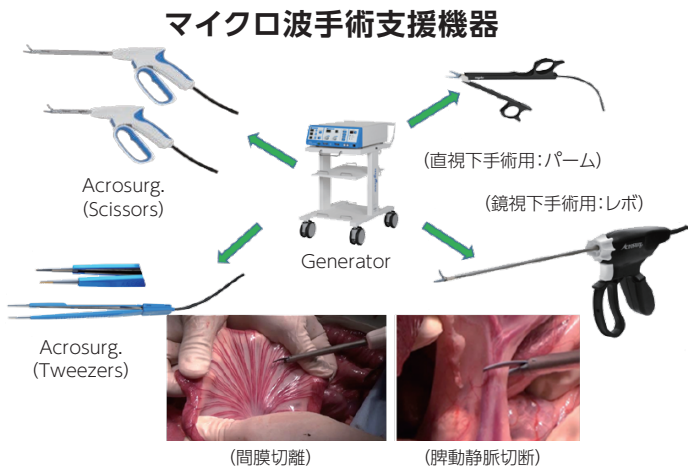


三日月知事と受賞者(下段右から二人目が辻田准教授)

谷特任教授、山田特任准教授、仲客員教授が 令和4年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞

本学革新的医療機器・システム研究開発講座の谷 徹特任教授、同講座の山田篤史特任准教授、本学 仲 成幸客員教授が、令和4年度「科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞」を受賞しました。

この表彰は、文部科学省が、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術の水準の向上に寄与することを目的として、我が国の社会経済、国民生活の発展向上等に寄与し、実際に利活用されている画期的な研究開発若しくは発明を行った者に授賞するものです。令和4年度受賞者として、授賞件数18件(60名)が決定されました。



この度、私、谷徹と山田篤史、仲成幸は、血も煙も出さずに生体組織を切断出来るマイクロ波をエネルギーとしたハサミ型手術機器等を開発・製品化して、マイクロ波を実質的に医療分野に導入した功績に対して上記の賞を受賞しました。

約20年をかけた事業は、多くの方々支援の下、研究や財政のサステナビリティの重要さと類まれな我々のアクティビティを具体例で示し、評価されたと考えます。賞は大学と支援くださった皆様の結果でもあります。

マイクロ波では、凝固する際に従来品と違い煙やミストがほとんど出ないため、焦げ付きもなく、加温のオンオフが即座に出来るという利点があります。また、作業部をハサミの刃形状としたことから、エネルギー照射を集中でき、止血・切断が途切れずに可能となりました。そのため、クリアな術野の提供が可能となり、安全性の向上や手術時間の短縮、患者さん・医療人への負担が軽減され、手術予後の改善も期待されます。

海外で展開しうる機器の開発は、日本初の試みです。この開発は医療機器分野へのマイクロ波本格導入の先駆けとなり、また、医科単科大学での医-工連携推進の可能性を示しました。



中央:革新的医療機器・システム研究開発講座(寄附講座) 特任教授 谷 徹

右:外科学講座(消化器・乳腺・小児・一般外科) 客員教授 仲 成幸(日野記念病院 院長)

左:革新的医療機器・システム研究開発講座(寄附講座) 特任准教授 山田 篤史



『食事による循環器疾患リスク予測ツール』を

ウェブサイトで一般公開

『NIPPON DATA』研究より



NCD 疫学研究センターの三浦克之センター長が研究代表を務める、厚生労働省指定研究『NIPPON DATA』研究のホームページ上で、食事による循環器疾患のリスクが簡単に計算できる『食事による循環器疾患リスク予測ツール』が公開されました。

ツール制作の意図や公開の目的などについて、三浦センター長と制作に携わった近藤慶子講師（学内）にうかがいました。

食事から将来の循環器疾患リスクを予測

『NIPPON DATA』研究は、厚生労働省が実施した国民健康・栄養調査と循環器疾患基礎調査の参加者を対象に、長期に渡って追跡調査する研究で、日本人の生活習慣病と健康寿命に影響を与える要因を明らかにすることを目的としています。

『NIPPON DATA』研究では、詳細な食事調査により、栄養素摂取量（総カロリー、脂肪、蛋白質、食塩など）、食品群摂取量（野菜、果物、魚、肉など）が評価されています。他にも飲酒量や喫煙習慣、身体活動、運動習慣、社会的な要因などの調査や肥満度、血糖値などの各種検査が実施され、これらの調査から得られたデータに基づき、将来の生活習慣病との関係を分析しています。そして、その分析結果は生活習慣病の予防に活用されています。



『食事による循環器疾患リスク予測ツール』は、2019年に日本循環器学会の学会誌に公表した論文『食事因子の組合せによる循環器疾患死亡リスク評価チャート』をもとに作成しました。論文を発表した際、保健師・栄養士の方々から、循環器疾患リスクを簡単に知ることができるとツールのほうがほしいというお声をいただいたことがきっかけとなり、保健医療従事者の方々はもちろん、国民のみなさんに使っていただけのようなツールの制作に着手しました。

このツールでは、食塩、魚、果物、野菜という身近な食品の摂取状況を、「多い」「少ない」「あまり食べない」「そこそこ食べる」「よく食べる」といった回答から選ぶことで、脳卒中や心臓病などの循環器疾患のリスクが予測できます。食塩、魚、野菜、果物は強く循環器疾患のリスクを左右する因子で、最も望ましい食生活（食塩は少なく、魚・野菜・果物をよく食べる）をしている人を1とした場合、リスクが何倍になるかを数字で表しています。さら

に、循環器疾患のリスクレベルが、色分けされたチャートで分かりやすく示されるほか、リスクレベル別に「この調子で続けましょう」「要注意！食生活を見直しましょう」といったコメントが表示され、食生活を変えようとリスクの数値がどのように変化するか、シミュレーションもできるようになっています。

また、食生活改善のヒントとして、具体的な取り組み方に関するアドバイスを確認することもでき、食生活のすべてを変えられないのではなく、何からできるか自分で考えて選択し、できるところから取り組めるようになっていくのがこのツールの特徴です。



やさしい設問やキャラクターのイラストを使った親しみやすいツールになっていて、摂取目安量をイラストで表したり、キャラクターの吹き出しで説明を補足したりと、回答しやすいよう工夫を凝らしています。

健康アプリなどへの 利用にも期待

このツールは、保健医療従事者の方々に広く保健指導などに活用してもらうだけでなく、だれもがパソコンやスマートフォンからアクセスできるようなホームページで一般公開しており、オンライン上で手軽に自分のリスクを知ること、食生活改善への動機付けになることを期待しています。

4つの因子の過不足は日本人の食事の大きな問題点なので、食事を改善する動機づけのためのツールとして広く活用してもらいたいです。マスコミやSNSなどを通して周知に努め、でき



るだけでなくの方に活用していただくだけでなく、例えば健康アプリに取り入れていただくなど、利用が広がっていくことを期待しています。私たちの研究データを広く国民や企業に活用していただくこと、研究成果を国民に還元することが研究の目的の一つです。ぜひ多くのみなさんに活用していただき、このツールを広めていただければと思います。



食事による循環器疾患リスク
予測ツール
<https://shiga-publichealth.jp/nippon-data/diet-tool/>

<QRコード>





医学部看護学科教授

伊藤 美樹子

医学部看護学科教授

河村 奈美子

コロナ禍における演習・実習の激減に対応 体験的学習を質的に 促進するVR教材を開発

実践の科学である看護学教育は、知識を知覚・感覚と融合し、対象との相互作用の下に実践する体験的学習が重要になります。医学部看護学科では、コロナ禍による実習や演習機会の激減に対応するため、学生がリアルに近い空間で対象者の感覚や価値観、個性を認識するためのVR教材の開発・制作に取り組みました。

**コロナ禍で実習機会は
2分の1、演習機会は
3分の2に**

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、学生が実習で在宅患者さんなどの家庭を訪問することが困難になったほか、患者さんとのコミュニケーションも制限せざるを得ない状況となったため、765時間あった実習は2分の1に、570時間あった演習は3分の2に減少しました。

コロナ禍で実習・演習の機会が減少したことを受け、体験的な学習経験を質的にも量的にも確保することが必要となりました。そこで、看護学科の教育内容を見直し、変化の大きな社会や多様な生活に対応できる実践力を身につけるためのVR教材の開発を行うこととしました。また、その実現に向け、計画を策定の上、文部科学省令和3年度大学改革推進等補助金「ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」に応募したところ、採択されました。

これまで、保健師課程では、実際に家庭を訪問させていただく実習を行ってききました。家庭ごとの異なる環境や社会的・経済的状况、患者さんやご家族の考え方や生き方など、臨床現場の感触や肌感覚を養うことで初めて生きた実習になると考えています。「人工



現実感」や「仮想現実」と訳されるVR (Virtual Reality) では、リアルに近い空間で実体験に近い体験が得られることから、

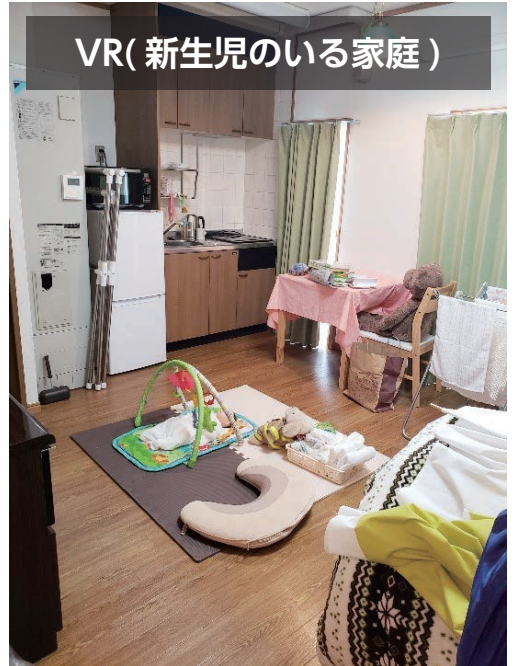
ウイズコロナ時代においても、この教材を使うことによって、体験的学習を質的に促進することができると期待しています。

生活や価値観の多様性を知り、推論する力を身につけるために

今回、基礎看護、訪問看護、公衆衛生看護、精神看護、老年看護の5領域を対象にVR教材を作成しました。

VRゴーグルを装着すると、在宅療養されている高齢者の住宅や、新生児のいる家庭などを訪問したようにリアルな画像を見ることができ、薬袋や食べ残しなどが置かれた散らかった部屋の様子や、新生児を取り巻く環境などを看護師の視点でチェックできるようになっています。

また、病院の個室を再現したVRで



VR(新生児のいる家庭)



VR(高齢者の住宅)

と分かる仕組みになっています。VRによる疑似体験を通して、患者さんやケア対象者の視点に立つことの大切さに気づいてほしいと考えています。

そのほかにも、幻聴のある患者さんの状態を疑似体験できるVRでは、多方向からさまざまな雑音が聞こえ、医師の話が聞き取れない状況を実際に体験することができません。医師が患者さんに何かを伝えたいと大きな声で話しても、ますます理解ができなくなり混乱するといったことに対して想像力を働かせてもらえることを期待しています。

制作に当たっては、部屋に置かれたものや部屋の状況から、さまざまな気付きができるように工夫を凝らしています。また、同じVRであっても、低学年では訪問先の家庭の実態や配慮すべき点に気付くことを目標に、高学年になると部屋のどこに座って、どんな声掛けから会話を始めるか、あるいは優先度の高い支援は何かを考えるために、というように学習の目的を変えて使えるのも特徴です。



また、臨床の現場では、看護師の価値観だけで「良い」「悪い」を決めてしまっただけではいけないという点も理解してもらえたらと考えています。

この教材の目的の一つは、患者さんの生活や価値観の多様性を知り、推論する力を身につけることにあります。今後はいろいろな看護領域で視点を変えて活用できるよう、より効果的な使い方について評価・検証を行いながら、学内で教材として共有できるようにしていく予定です。

この教材はデジタル技術を活用した特色ある教育取組の普及を目指す『Scheem-D(スキーム・デー)』にも採択されていて、将来的には学生だけでなく、

看護師の卒業教育や研修に、さらには他の職種でも教材として、学外でも活用していただくことを期待しています。





—夢をカタチにする研究の推進—

機器の開発や創薬研究など、社会的インパクトの高い研究成果を目指したいと考えています。

以下、6つの共同研究講座が新設されました。

講座名	外部機関名	設置期間
分子工学研究所 機能性材料共同研究講座	コニシ株式会社	R4.4.1~R7.3.31
分子工学研究所 新材料分子設計共同研究講座	株式会社ADEKA	R4.4.1~R7.3.31
分子工学研究所 サステナブル素材開発共同研究講座	旭化成株式会社	R4.10.1~R7.3.31
再生医療開拓講座	株式会社バイオジップコード	R4.4.1~R6.3.31
生命情報開拓講座	三井化学株式会社	R4.4.1~R6.3.31
ミスフォールドタンパク質関連疾患治療学講座	大原薬品工業株式会社	R4.10.1~R7.9.30

生命情報開拓講座 再生医療開拓講座

再生医療開拓講座は、株式会社バイオジップコードとの共同研究講座として、2022年4月に開設されました。滋賀医科大学で独自に開発した技術を応用し、糖尿病、がん、自己免疫疾患などの難治性慢性疾患、多臓器不全ならびに従来の手術療法や薬物療法に治療抵抗性を示す病態に対し、既存薬再開発や新薬開発、ならびに組織再生をめざす医療材料の開発を行っていきます。



特別教授 小島 秀人



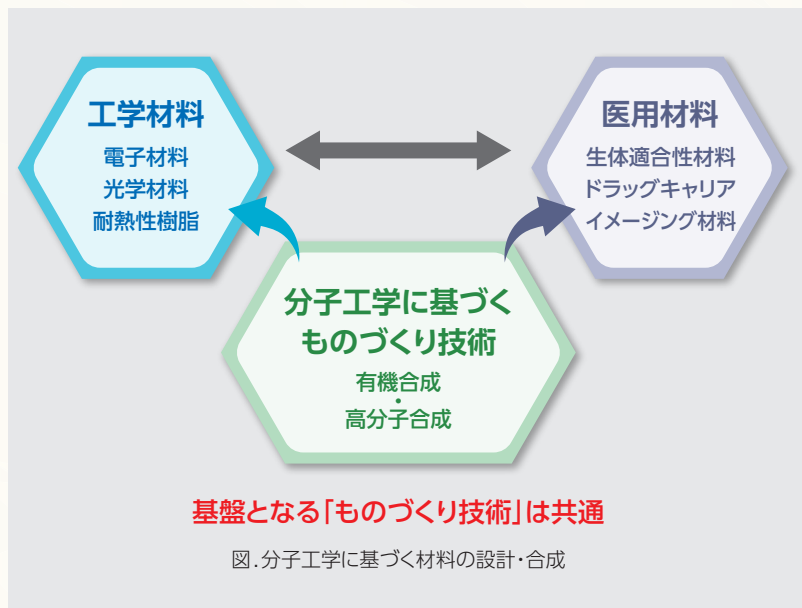
教授 漆谷 真

ミスフォールドタンパク質関連疾患治療学講座

ミスフォールドタンパク質関連疾患治療学講座は、2022年10月に大原薬品工業株式会社との共同研究講座として開設されました。筋萎縮性側索硬化症、アルツハイマー病、パーキンソン病などの神経変性疾患は、ミスフォールドタンパク質の蓄積という点で共通しており、何らかの共通の病態が存在している可能性が示唆されます。本研究講座では、ミスフォールドタンパク質をターゲットとした、治療法の開発を行います。

滋賀医科大学では令和4年度に、企業との共同研究講座が6つ設置されました。未来を拓く医療

分子工学研究所 機能性材料共同研究講座 新材料分子設計共同研究講座 サステナブル素材開発共同研究講座



分子工学研究所は大学と企業との産学連携研究を進めるために2000年に近畿大学にて設立されました。それ以来、近畿大学と九州工業大学にてあわせて22年間、様々な新規材料創出への挑戦を続け、本年4月に滋賀医科大学に研究場所を移しました。大学の基礎研究（シーズ）と企業の応用研究（ニーズ）の間には、極めて大きなギャップがあるため、一般的に産学連携で成果を出すことは簡単なことではありません。私たちは、大学人として基礎研究に軸足を置きながらも、積極的にそのギャップを埋めることで産学連携活動を成功に導き、数々の材料を世の中に送り出してきました。

私たちは有機合成および高分子合成に基づいた「分子工学」とよばれる手法を用いて機能性高分子材料の開発を行っています。これまでは、航空機材料、耐熱性樹脂、ポリペプチド材料など、主に工学材料の開発に取り組んできましたが、滋賀医大では、新たに生体適合性材料やイメージング材料などの医用材料にも取り組んでまいります。医用材料と工学材料はまったく別物ではないかと感じる方もいらっしゃると思いますが、基盤となる「ものづくり技術」は共通ですから、分子工学的手法により様々な医用材料を開発していくことが可能です。さらに、医学研究者とも連携することで、分子工学研究所と医学部および企業が三位一体となって、臨床における様々な問題を解決できるような、新しい医用材料の開発につなげていきたいと考えています。



活動実績ダイジェスト

学生 Student

本ページに掲載している肩書は、記事当時のものです。

研究医養成コース修了式を実施

2022年3月10日(木)に「滋賀医科大学 研究医養成コース修了式」を挙行之、以下の4名の学生が修了証書を授与されました。

- 医学科 第6学年 福永 諒 (生理学講座〈細胞機能生理学〉)
- 医学科 第6学年 緒方 綾子 (病理学講座〈疾患制御病態学〉)
- 医学科 第6学年 景山 裕介 (神経難病研究センター〈神経診断治療学〉)
- 医学科 第6学年 鴻上 奈央 (生化学・分子生物学講座〈分子病態生化学〉)



研究医養成コースとは？

本学は2011年度から研究医枠での入学定員の増員を申請、2012年度には文部科学省GP「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」のモデル事業へも積極的に応募し、いずれも選定されました。GP期間終了後は、大学独自の取組「研究医養成コース」として「入門研究医コース」・「登録研究医コース」を通じて科学的探究心の涵養を特に重視した教育を行ってきました。

2021年度、研究医養成コースは、学部教育部門研究医養成検討専門委員会の下、【医学・医療の発展のための医学研究の必要性を十分に理解し、批判的思考も身につけながら、学術・研究活動に関与する】ことを目的としてアウトカムを設定し、また、学部在学中に一定の要件を満たすことでアウトカムを達成したことを認定するため、「研究医養成コース」の修了証を交付することとして大幅な教育課程の改訂を行いました。

「令和4年度滋賀医科大学学生表彰」表彰式を挙

2022年11月29日(火)、「令和4年度滋賀医科大学学生表彰」表彰式を挙りました。本表彰は、学業または課外活動等において特に優秀な成績を修めた学生又は団体を表彰するものです。今年度の受賞者は以下のとおりです。

在籍区分	氏名	授賞理由
博士課程 3年	田中 克典	研究基礎力試験 (QE) において審査員の評価が最も高かった者
医学科 6年	中村 優月	
医学科 6年	毛利 圭佑	
医学科 5年	石山 博章	
医学科 5年	椿 遥花	
医学科 5年	松井 温哉	
医学科 4年	片岡 瞳	
医学科 3年	大西 統也	
医学科 2年	桑原 歩夢	
医学科 4年	住友 有由司	

令和4年度第1回滋賀医科大学学位授与式を挙

2022年10月3日(月)に令和4年度第1回滋賀医科大学学位授与式を挙行之、課程博士14名、論文博士4名にそれぞれ学位記を授与しました。

また、出席いただけないご家族の方々へ向けて、式典の様子をオンライン配信しました。

上本学長から、「学位を取得された皆さん、おめでとうございます。皆さんが今後、指導的な研究者や医療従事者等として、医学の発展と人々の健康と福祉の向上のために、それぞれの立場で存分に力を発揮され、ご活躍されることを祈念いたします。」と告辞がありました。



在神戸パナマ共和国総領事が本学を表敬訪問

2022年3月1日(火)、在神戸パナマ共和国総領事館のビクトル・アルメンゴル総領事が本学を訪問し、上本伸二学長を表敬しました。本学からは、遠山育夫理事(研究・企画・国際担当)、一杉正仁教授(社会医学講座(法医学部門))が同席し、パナマと本学との学生及び研究者の交流促進と、医学分野における連携強化について話し合われました。



表敬訪問後は、「メディカル・ミュージアム」を訪問し、予定時刻の間際まで相見教授に何度も質問を重ねるなど、見学会は大いに盛り上がりました。その後、アルメンゴル総領事は、本学附属病院内の「医師臨床教育センター」を訪れ、川崎拓教授(医師臨床教育センター長)の説明を受けながら、各種シミュレーターを体験されました。特に、内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチSi」につよく関心を持たれ、川崎教授に繰り返し詳しい説明を求められました。

今回の表敬訪問は、本学への理解を深めていただくと同時に、パナマとの学術交流の可能性を広げる大変有意義な機会となりました。

本学の代表団がマレーシア国民大学を訪問

2022年8月15日(月)から17日(水)まで、遠山理事(研究・企画・国際担当)、縣教授・副理事(国際戦略担当)、加藤教授・副理事(国際交流担当)、助川国際企画室主幹(国際交流センター副センター長)の4名がマレーシアの首都クアラルンプールを訪れ、マレーシア国民大学において表敬訪問ならびに学術交流等に関する協議を行いました。



マレーシア国民大学と滋賀医科大学は2011年に国際交流協定を締結し、神経難病研究センター、法医学講座などを中心に共同研究や人材交流を行い、教育面でも多くの同校出身者が本学大学院で学位を取得し、学部レベルでは看護学科の交換留学や医学科の短期研修などを継続的に実施し、密接な協力関係を築いてきました。

今回の訪問では、種々の交流を通じて友好を深めるとともに、国際共同学位プログラムの設置について有意義な意見交換を行いました。

今後のさらなる人材交流と多角的な連携の強化が大いに期待されます。

第26回SUMS 国際シンポジウムを開催

ハンガリーにおけるふたご研究の第一人者であり、ご自身もふたごの兄弟であるセンメルヴェイス大学のDr. Adam D Tarnoki・Dr. David L Tarnoki両先生をお招きし、また矢野NCD疫学研究センター最先端疫学部門教授にもご登壇いただいて「疫学研究が結ぶ国際交流」を企画し、2022年9月21日(水)に開催いたしました。

シンポジウム内では演者と会場参加者による活発な発表及び討論が行われました。



国費留学生と学長との懇談会を開催

2022年1月26日(水)、2020年度及び2021年度採用国費留学生と学長との懇談会を開催しました。

当日は、上本伸二学長のほか、遠山育夫理事(国際交流センター長)、加藤穰教授(国際交流センター副センター長)等が参加し、国費留学生による自己紹介の後、学長らが学生からの質問や要望に答えるかたちで、和やかに懇談を行いました。

今回参加した国費留学生は、全員がコロナ禍での渡日となり、予定より大幅に遅れて来学しました。来学が遅れたことによる研究日数の減少や、本学附属病院での臨床実習が行われないことなど、コロナ禍ならではの不安や要望が多く挙げられ、それぞれの質問に対し、上本学長をはじめ、遠山理事、加藤教授が真摯に向き合い、時には留学生と議論を行うなど、大変有意義な会となりました。



西武ライオンズ栗山選手より おもちゃのご寄附を いただきました

西武ライオンズ栗山巧選手より、公益財団法人「がんの子どもを守る会」を通じて2022年11月17日(木)に小児科のこどもたちへおもちゃを多数ご寄附いただきました。

いただいたおもちゃは小児科にて大切に使用させていただきます。



滋賀銀行 SDGs私募債「つながり」 を活用したご寄附をいただきました

滋賀銀行 SDGs私募債「つながり」を活用し、老人ホームコンソルテ（株式会社松屋）様より、ご寄附をいただきました。2022年5月17日(火)には、トータルケアライフ株式会社（株式会社松屋関連会社）高谷 政市代表取締役が、滋賀銀行栗東支店 岡 敦哉支店長、同 富岡 慶仁支店長代理とともに本学附属病院病院長室へご来訪くださり、目録を贈呈くださいました。

今回の温かいご寄附に対し、病院長から謝辞が述べられ、附属病院の医療を通じた地域への貢献と、地元企業とのつながりを再確認する機会となりました。



内科学講座（脳神経内科）漆谷教授、ペインクリニック科 福井聖病院教授が Best Doctors in Japan 2022-2023に選出されました

Best Doctors in Japanは、米国のベストドクターズ社によって毎年実施される医師同士の相互評価（ピアレビュー）に基づき実施されます。選出プロセスの中では「もし自身や大切な人が、自らの専門分野で治療が必要となった場合、自分以外の誰に治療を委ねますか？」という観点に基づく質問等を実施し、ある一定以上の評価を受けた医師が、その年のベストドクターとして選出されます。

本学からは内科学講座（脳神経内科）漆谷教授、ペインクリニック科 福井聖病院教授がBest Doctors in Japan 2022-2023に選出されました。



令和4年度近畿府県合同防災訓練にDMAT（災害派遣医療チーム）が参加

滋賀県長浜市の旧長浜北高等学校跡地をメイン会場とした令和4年度近畿府県合同防災訓練（緊急消防援助隊近畿ブロック合同訓練）（滋賀県総合防災訓練）が実施され、本学医学部附属病院からは5名のDMAT隊員が参加しました。

本訓練は滋賀県内では9年ぶりの開催となり、滋賀県のほか、福井県、三重県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県から合計約110機関、人員約3,500人、車両約250台、航空機18機、船舶2艇が参加する大規模訓練となりました。本院DMATは旧長浜北高等学校跡地に設置された現場救護所で近隣消防や自衛隊、警察などと連携し患者の救出や処置、搬送などの訓練を実施しました。



僧帽弁閉鎖不全症に対する新たなカテーテル治療を滋賀県内で初めて実施

僧帽弁閉鎖不全症に対する新たな治療法である、経皮的僧帽弁クリップ術（MitraClip）は、胸を大きく切開したり、心臓を止めたりする必要がないため、外科手術と比較し、患者さんの身体への負担を大きく軽減することが可能です。

滋賀医科大学医学部附属病院は、県内で唯一、経皮的僧帽弁クリップ術（MitraClip）を実施可能な施設に認定され、循環器内科の中川義久教授、林篤志助教、八木典章助教らは、令和4年11月9日に本治療を滋賀県内で初めて実施しました。



- オンライン記者説明会を開催 -

研究 Research

レム睡眠行動障害における抑うつ状態の有病率に関する系統的レビューを世界で初めて報告 —Sleep Medicine Reviewsに掲載されました—

レム睡眠行動障害（以下、RBD）は、寝ているときの夢に関連して寝言を言ったり、身体が動いたりする睡眠障害です。

今回、角 幸頼助教、増田 史助教、尾関 祐二教授、角谷 寛特任教授らの研究グループは、RBDにおける抑うつ状態の有病率に関する系統的レビュー及びメタ分析を世界で初めて実施し、RBDでは抑うつ状態の合併率は約30%と高いことを研究によって示しました。研究成果をまとめた論文は、睡眠医学に関する医学雑誌であるSleep Medicine Reviewsに掲載され、2022年9月21日に公開されました。



- オンライン記者説明会を開催 -

人工血管用材料（ePTFE）を使用することで屈曲性能を大幅に向上させた先端可動カテーテルを発売 —医療用軟性機器の共同研究開発成果—

革新的医療機器・システム研究開発講座の山田 篤史特任准教授が主導し、内科学講座消化器内科の稲富 理准教授、日本ゼオン株式会社とともに、屈曲性能を大幅に向上させた先端可動カテーテルを開発しました。このカテーテルは従来製品と比較して最大屈曲角度が最大3倍で、約50%小さく曲がり、耐久性と安全性を向上させた先端の可動部を実現しました。

この研究成果を採用した内視鏡的逆行性胆管膵管造影（ERCP）検査用のゼメックス先端可動カニューレ（KC226）が、12月にゼオンメディカル株式会社から発売されました。



- オンライン記者説明会を開催 -

玉木准教授が「第42回日本看護科学学会学術集会」で最優秀演題口頭発表賞を受賞

2022年12月3日（土）～4日（日）に広島国際会議場、広島市文化交流会館で行われた「第42回日本看護科学学会学術集会」にて、本学の基礎看護学講座（基礎）玉木 朋子 准教授が最優秀演題口頭発表賞を受賞しました。「優秀演題口頭発表賞」は看護学の発展に貢献が見込めることが大である口頭発表演題に贈られる賞で、玉木准教授は、演題発表題目「多人数学生を対象とした終末期ケアシミュレーション教育シナリオの開発—主観的評価：フロー体験と客観的的技能評価：OSCEを基盤として—」を発表されました。



大学院生Md Rasel Mollaさんが日本循環器学会国際留学生YIA最優秀賞を受賞

大学院生Md Rasel Mollaさん（分子病態生化学部門）が、第86回日本循環器学会で国際留学生Young Investigator's Award（YIA）最優秀賞を受賞しました。

この賞は、海外から日本へ留学して循環器学領域で研究を行っている若手研究者を対象として、循環器疾患に関する基礎的あるいは臨床的研究で優れた研究成果を挙げたことを表彰するものです。

Mollaさんは、血管平滑筋に発現する低分子量Gタンパク質RhoAが、重篤な血管疾患の一つである大動脈瘤の形成を抑制している分子メカニズムを独創的な発想と実験法で明確に示したことが高く評価されました。



周年記念事業のご案内

の皆さまをはじめ関係各位のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

節目として、今一度、本学の理念に込められた“想い”を胸に刻み、「湖国に滋賀医大あり！」とさらに世界にアピールできるよう、

計画しております。

及び滋賀県に愛着を感じてもらえるような空間を目指し、開学 50 周年記念事業準備委員会にて検討を重ね、完成イメージ（パース）

※完成イメージは、計画段階でのイメージであるため、今後変更になる可能性があります。

同窓会(湖医会)スペースの新設

Point

東側の窓からはリニューアルした中庭を見渡せます。

現在の中庭の雰囲気イメージし、内装にレンガを取り入れます。(中庭レンガの再利用も可能な範囲で実施する予定です。)



学生食堂の上階フロア(福利棟 2階)にある「多目的ラウンジ」を改修し、どこか懐かしく落ち着ける雰囲気「同窓会(湖医会)スペース」を新設します。卒業生が立ち寄りやすいよう、また、在学生と交流を図りやすいよう、その横に同窓会(湖医会)事務室を移転します。

学生食堂リニューアル



木材を使用した温もりのある学生食堂にリニューアルする予定です。内装カラーは学生・教職員・卒業生等からの意向投票により「オーク系の明るくナチュラルな雰囲気」に決定しました。



意向投票では
合計488票のうち
301票を獲得しました

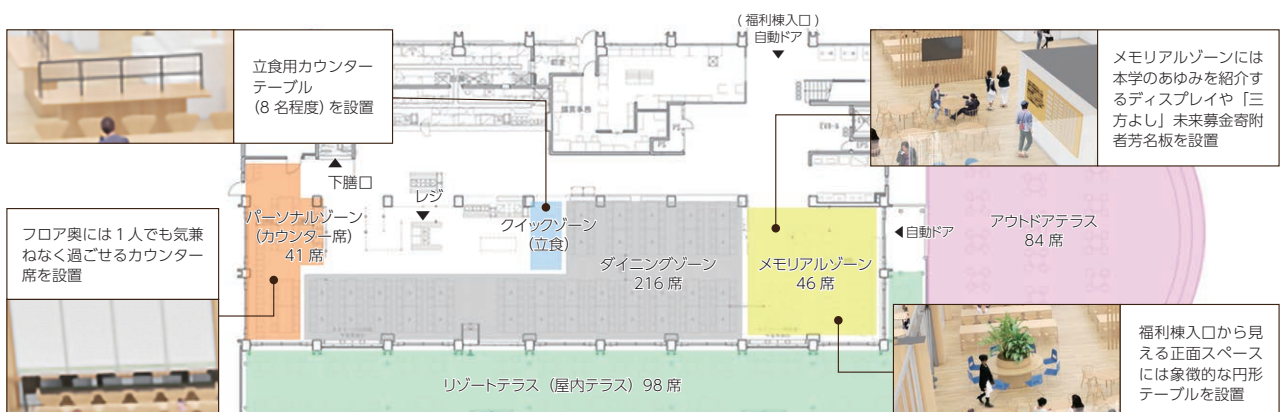
Before 現在の学生食堂



Point

リニューアルのポイント：多様な用途に合わせたゾーニング

福利棟 1 階 学生食堂平面図



リニューアルにより、席数は 50 席程度増加する予定です。(現在：約 430 席→リニューアル後：485 席+立食 8 名程度)

滋賀医科大学開学 50

本学は、1974年に一県一医科大学の構想に基づき設立され、2024年10月に開学50周年を迎えます。これもひとえに、寄附者本学は、これまでの半世紀、地域に支えられ、地域医療に貢献しながら、一步一步、あゆみを進めてまいりました。開学50年をより一層の飛躍を目指します。

滋賀医科大学開学50周年記念事業の一環として、中庭リニューアル・学生食堂リニューアル・同窓会（湖医会）スペースの新設を2024年9月頃の完成を目指し、学生・教職員・同窓生のみなさんなど、多くの方々から頂戴したご意見・アイデアをもとに、本学を作成致しました。

中庭リニューアル



Before 現在の中庭

本学の学章や“さざ波”をモチーフにした曲線的で広がりのあるデザインです。中庭中央に気持ちの良い芝生広場を整備するとともに、憩いの場となるよう、3箇所（福利棟東側、臨床研究棟西側、図書館西側）にテラスを配置する計画です。

Point1 芝生広場



中庭中央の芝生広場には、ベンチや東屋（あずまや）を整備する予定です。また、四季を感じとれる植栽として、滋賀県の木「もみじ」を植える計画です。長年にわたり本学を見守り続けている中庭中央のシンボルツリーはそのまま残します。

Point2 食堂テラス（アウトドアテラス）



手狭な学生食堂の混雑緩和・座席数確保のために、学生食堂につながる広々とした食堂テラス（アウトドアテラス）を整備する計画です。テラスには84席を設置予定です。

滋賀医科大学 開学 50 周年「三方よし未来募金」ご協力をお願い

開学50周年を迎えるにあたり、『湖国とともに、世界に羽ばたく～医療のあゆみ半世紀、さらなる飛躍へ～』をスローガンに掲げ、開学50周年記念事業を進めております。また、本事業の実現に向け、『滋賀医科大学 開学50周年「三方よし」未来募金」を創設いたしました。本事業の趣旨にご賛同いただき、格別のご理解を賜り、ご支援・ご協力をお願いできれば幸甚に存じます。

銀行振込によるご寄附（ゆうちょ銀行、各種金融機関）

資料請求フォーム（下記QRコード）にてお申込みいただくか、下記お問い合わせ先までご連絡ください。開学50周年「三方よし」未来募金振込用紙等の資料一式をお送りいたします。
※ご利用の金融機関によっては、その他、別途手数料がかかる場合がございます。

資料請求は
こちらから



お問い合わせ先 hqkouhou@belle.shiga-med.ac.jp

クレジットカード等によるご寄附

クレジットカード、コンビニエンスストア、Pay-easyがご利用いただけます。下記のQRコード、URLからお申込みいただけます。

お申込みは
こちらから



<https://50th.es.shiga-med.ac.jp/donate#d04>

記念事業の進捗等は、特設記念サイトからご覧いただけます。

特設サイトは
こちらから



湖国とともに、
世界に羽ばたく
医療のあゆみ半世紀、
さらなる飛躍へ



滋賀医科大学へのご支援をお願いいたします。

滋賀医科大学では、皆さまからの経済的なご支援をいただくため、「滋賀医科大学支援基金」を設けております。

詳しくは、本学ホームページをご参照ください。

<https://www.shiga-med.ac.jp/contribution/contribution-for-sums>

滋賀医大 基金

検索



大学ホームページの「パンフレット・振込用紙一式」請求フォームからお申出いただきましたら、一式を郵送させていただきます。

※取得した個人情報は滋賀医科大学支援基金の業務のみに使用します。

また、附属病院内にも、申込様式(パンフレット・振込用紙一式)を設置しています。

上記以外にも、次の方法でご寄附いただけます。

古本募金

読み終えた本や不要となったDVD等を本学指定の業者(嵯峨野株式会社)にご提供いただくと、査定換金額が「滋賀医科大学支援基金」に寄附される制度です。Web申込による、宅配業者の回収も可能です。

※5冊以上で送料無料です。

[Webでの申込み用URL] <http://kishapon.com/sums/entryweb.php>



遺贈

遺言書をつくり、遺産を特定の人や団体に譲与することを「遺贈」といいます。遺贈によるご寄附も承っており、信託銀行と協定を結んでおります。

ご支援に関するお問い合わせ先: 滋賀医科大学総務企画課 TEL.077-548-2012